

# 砂糖と異性化糖の需給見通し

## ～海外からの加糖調製品の動きに注視

農水省は平成29年砂糖年度及び同年度の10～12月期における砂糖と異性化糖の需給見通しを発表している。砂糖を扱う業界にも年度があり10月1日より9月30日が区切りとされている。4半期毎に国が国内の生産量や消費・供給量の見通しを把握し情報発信している。

昭和40年から砂糖及びでんぷんの価格調整に関する法律の施行により国の直接関与がなされており糖価調整金制度によって販売価格が調整されている。サトウキビは沖縄県や鹿児島県の離島地域、甜菜は北海道が主産地にて輪作体系には欠かせない作物となっており、地域の基幹産業である。砂糖類の需給見通しは分蜜糖、含糖蜜、異性化糖の分類にて見通しが公表されている。聞きなれない分類かも知れないが、分蜜糖とはサトウキビやビートを原料とする糖汁を結晶化し糖蜜を分離したもので、商品としては上白糖やグラニュー糖などがある。含糖蜜は、サトウキビを原料とする糖汁を濃縮し糖蜜を分離せず固化させたもので商品としては黒糖などとなっている。最後に異性化糖とは、ブドウ糖と果糖の混合液糖のことであり、商品としては清涼飲料に使用されておりとても身近なものとなっている。

独立行政法人農畜産業振興機構調べでは砂糖の世界第1位の生産国はブラジルで次いでインド、中国、タイ、パキスタンで、この上位5か国で半分のシェアとなっている。一方、日本は生産量の世界シェアは僅か0.4%で平成27年度の生産量は81.3万トンに対し輸入量は123.5万トンと1.5倍の輸入量となっている。世界における砂糖の国際需給については人口増加のため生産量・消費量ともに右肩上がりとなっているものの、一人当たりの消費量についてはタイと韓国や中国を除いて右肩下がりとなっており、日本国内における消費量は1972年を境に緩やかな減少傾向である。近年では消費者による糖質制限ダイエットや糖質オフ飲・食材等の低甘味嗜好が年々増加している事から砂糖の消費量も減少傾向となっているものと考えられる。ただし、輸入糖の輸入量においても平成23年をピークに減少傾向にあるものの、ココアやチョコレート等の加糖調製品としての輸入量は緩やかに消費量が伸びておりここ10年間で10万トン輸入が増加した。原料としての砂糖ではなく製品化された形で砂糖が入ってきている状況にあり、国産の砂糖の需要は減少してしまう結果となっている。

今回のTPP11協定大筋合意では、この加糖調製品に関税割当枠を作り枠内関税を引き下げられた。加糖ココア粉の場合、関税割当初年度5千トンから6年目は7万5千トンになり、関税も29.8%から11年目には14.9%にまで下がる。今回アメリカは除かれているが、加糖調製品分野で日本と利害関係にある国はシンガポール、マレーシア、オーストラリアが該当する。さらに、日EU間でEPAが大筋合意したことを受けて砂糖は国内のてん菜、サトウキビの生産に特段影響はないだろうとしているものの、加糖調製品の輸入増大により糖価調製制度の運営に支障を来すことが懸念されている。TPPについてアメリカは参加しないことを表明しているが、砂糖だけでなく今後関税が部分解除・撤廃される農産物においては国内生産者にとってどのような影響となるのか、引き続き注視していく必要がある。

# 北海道の畑作物 “てんさい”

今回は、北海道の主要作物のひとつ“てんさい”をご紹介します。北海道以外の方は、なじみがない作物と思いますが、てん菜（てんさい）は砂糖の原料として、また、連作障害軽減の輪作作物として北海道になくてはならない作物となっています。別名をビートもしくはサトウダイコンと呼ばれ、収穫時の姿は写真のような姿をしています。一見カブのようですが、アブラナ科ではなく、ホウレン草と同じヒユ科の2年草です。

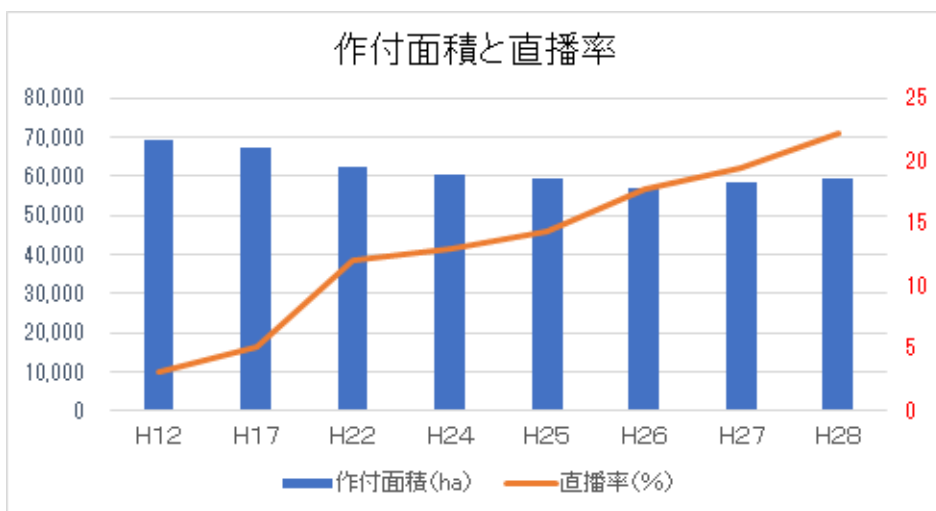


## ○てんさいの栽培

3月にハウスでペーパーホットに播種され苗づくりが始まります。5月上旬から本圃に定植され、6～8月は気温の上昇とともに生育が旺盛になり写真のような姿が出来上がります。9月になり気温が下がり始めると糖の蓄積が進みます。10月下旬～11月上旬にかけ収穫作業が行われます。収穫作業が始まる10月下旬から、北海道内の製糖工場が稼働し、翌年3月まで砂糖が生産されます。

## ○てんさいを取り巻く環境

作付面積は平成12年69,200haでしたが現在は減少傾向となり平成28年は59,389haとなっています。減少原因として、生産者の労働力不足、天候による病害の多発と糖度の減少により反収が減少した事が挙げられます。対策として作業の省力化が計られ、主に圃場への直播が導入されています。北海道農政部生産振興局によると、直播率は平成12年3.2%でしたが、年々上昇を続け平成28年には22.2%に達しました。(図1)



## ○砂糖の国内需要

平成27年の砂糖の国内需要はおよそ1,980千ト、その内500千ト（約25%）がてん菜糖となっています。砂糖の国内需要を見ると、昭和50年には2,877千トあった国内需要は、平成27年には1,980千トと減少しているなか、てん菜糖は昭和50年の224千トから平成27年には500千トと増加しており、国内の砂糖需要を支える重要な位置づけとなっています。(札幌支店)

11日、気象庁はラニーニャ現象が発生したとみられると発表しました。ラニーニャ現象が発生すると、日本の冬の気温は平年より低くなることもあり、特に東日本から西日本に寒気が流れ込みやすい傾向があります。気象庁から発表された3か月予報によると、3か月平均では全国的にほぼ平年並みの予想になっていますが、北陸や関東から九州にかけては、平年より低い確率が40%、平年並みの確率が30%、平年より高い確率が30%と、平年より低い確率がわずかに高くなっています。東日本や西日本では、この冬は寒気の影響を受けやすいかもしれません。寒い冬になりそうです。お気を付けてください。

編集事務局：南部、助川